

双葉郡教育復興ビジョン推進協議会 WG①

「ふるさと創造学」担当者会議 概要

- 日 時：平成 26 年 5 月 27 日（火）13:30～16:30
- 場 所：ビッグパレットふくしま
- 出席者：双葉郡 8 町村立学校担当教員 20 名、高校教員 1 名、県教育庁高校教育課 2 名、
その他関係者 13 名
- 概 要：



「福島県双葉郡教育復興ビジョン」の具現化に向けて、平成 26 年度より、町村立学校および双葉郡の高校において、「ふるさと創造学」を実施するため、担当教職員を集め研修会を行った。

開会の挨拶として、大熊町武内教育長より、福島県内のそれぞれの学校に勤務されている先生方に対して、以下の通り挨拶があった。「私達は今、借り上げ住宅、仮設住宅、仮設の校舎など仮というところにいるが、子供にとっての一日一日に『仮』はない。一番大事な少年少女時代を今過ごしており、その大事な時間のために、双葉地区教育長会においてもそれぞれの町村で一生懸命やっているが、なかなか子供たちが集まってくれない状況中、どんどん子供が減っている。次善の策として子供たちの教育を守りたいという思いで、福島県双葉郡教育復興ビジョンを作り、関係者と力を合わせて現在具体化を進めている。本日は双葉郡の先生をはじめ、浪江高校佐藤校長先生、県教委の方、また、今日のテーマである『ふるさと創造学』について検討いただいているワーキンググループ①～③の委員にも来ていただいている。教育復興ビジョンの生徒像としては、今までのような教えられたことをそのまま行うだけではなく、自分の頭で考え、自分で判断し、自分の足で歩き、自分で行動する子供たちを育てたい。この双葉郡の困難な状況から育てば、世界にも通じる人材になる。心や命を大切にする教育、人間中心の教育にしようとして検討している。実践力を育てるため、アクティブラーニングをおこない、地域社会に出て、地域の人達と育ち、新しいふるさとを創造する学習を進めたい。教師とは変革的知識人でなければならない。

地域の課題を地域の人達と、地域を共に変革していくのが教師である。単に自分の知識を子供たちに注入するのが教師ではない。先進地域を見ても町づくりがうまくいっているところは子供が関わっている。本日事例紹介があるが『成り行きの未来』ではなく『意志ある未来』を創りたい。そして自己肯定感を育て、自信をもって社会に出て行く子供たちを育て、先生達の手で、ふるさとを『創造』していく力を育てたい。」

人材育成と地域創造の相乗効果を生んでいる先進事例の取組として島根県海士町の取組が紹介された。海士町の岩本悠さんによるプレゼンテーションでは、幼稚園で「in（地域に浸る）」小学校で「about（地域について知る）」中学生で「with（地域と共に）」、高校生で「for（地域のために）」と発達段階に応じたふるさとの復興に向けた資質・能力を育成している事例について説明がなされた。また、「グローバル人材」の育成に向けた国際交流の推進や、寮生活を通して地域に根ざした循環型の暮らし方の知恵を学ぶ生活教育、コミュニティスクールの導入など地域運営学校化等、少子高齢化の未来を切り拓くモデル校としての取組が紹介された。地域課題を抱える地域として、「成り行きの未来」ではなく「意志ある未来」を作っていかななくてはいけないとメッセージが送られた。

担当者会議を企画したワーキンググループ①の半谷教育長より、海士町での取組やノウハウを生かして、双葉郡の教育再生と地域活性化に生かせないか、この震災後閉塞している現状に対して、新しい価値観のもと復興を担う人材の育成が出来ないかこの研修会を企画された経緯が説明された。

その後、参加者より「ふるさと創造学」として、実践的な学びであるアクティブラーニングをどのように双葉郡の学校で進めるかについて意見交換をおこなった。

(A班) 各学校の現状の中で、課題になっているものを話し合った。これから地域を知らない子供や教員が増えてくるだろう。そこで伝えていくべきふるさと、地域の魅力とは何か、『なぜふるさと教育を行うのか』意見交換がなされた。このふるさと創造学は、地域に「子供たちを戻す、戻さないという教育」ではなく、地域の良さを受け継ごうとしている人や復興に取り組む人へのインタビュー等を行うことで「人を通して生き方を考える教育」であり、将来「主体的に正しい立場で選択をする力を育む教育」である。また、保護者や地域の人々を揺り動かし復興の力とするための教育なのではないか。例として、仮設住宅のお年寄りをお孫さんが訪問することで、地域の横のつながりも生まれ、コミュニティができる。浪江小学校では「ハブスクール」というコンセプトで取り組んだ、こうした学校からの地域づくりが始められるのではないだろうか。

(B班) それぞれの地域で取り組んでいるふるさと学習について意見交換がなされた。その中で、なぜふるさと創造学なのか。ふるさとを学ばせるか、子供自身が学ぶのか。なぜ創

造学かという議論を行った。ふるさと創造学は、積極的に地域の人材を活用して地域を継承するということであり、地域を離れても取り組むことが出来る先祖からの「ルーツの継承」である。また、地域について考え、自己実現を図るものである。経験や体験から学ばせることで、地域の未来と自分の未来とを重ね合わせることができる。学びながら、様々な能力を身につけて大人になってからの自己実現につなげていく。「ふるさと創造学」を通して、様々な能力を身に付けると共に、未来を創ることができる。自分は一体何者なのかということを知り、伝統や文化を学んでいくことで、自分の将来と地域の未来を考えていくことが出来る。その成果を遠く離れた全国に避難している子供たちへも定期的に発信していきたい。

(C班) 各町村、各学校の枠を取り外して新しい取組が出来ないか議論した。この秋のふたばワールドでの「ふるさと創造学」の発表会はどのようにしたらいいのかという点も議論した。準備期間が短い中でどのように準備を進めるかが課題であるが、子供たちが自分の未来を考え、10年後、20年度の自分に向けて手紙を書き発信する等の取組も考えられるのではないかと。バラバラになった子供たちもふたばワールドに参加するきっかけともしたい。子供たちに夢を見せるためにも教員も夢を持たなくては行けない。避難先の別の町に学校が立ち上がっている状況であるが、「新しい土地で自分のふるさと、先祖を考える」という視点もあるのではないかと。

(D班) 各学校の実践を紹介した。各学校では、村長、大学、地元の企業など多くの方と連携しながら地域学をおこなっている。他の学校や町村が何をやっているのか知らなかったのが問題であった。この研修会で、町村や学校を越えて、互いにどんなことをやっているのかを知ることができてよかったし、知ることが大切だと感じた。地域のことを知らない子供たちにとっては「親のふるさと」について学ぶ。実際地域の「in」がない中、どう学習していくのかは課題である。戻ってきた子供たちが夢を語り、生き生きしている姿を見ると、「about」「with」とつなげていくことの大切さを感じる。

(E班) 各学校での取組、各町や村の取組について意見交換が行われた。ふるさと創造学におけるスタートラインは、時間が進んでいく中で児童生徒や保護者の思いを忘れては行けないということ。

(F班) ふるさととは何かを話し合った。小学校低学年においてはふるさとが分からない子供が多い。今住んでいるところがふるさとになってしまう。地域や町村単位で取り組んでいたが、双葉郡や福島県全域に視野を広げていかなくては行けない。生徒の人数が少ない中で、各学校のつながり、大学生との交流、町内村内の交流の場として学校があるべき。何のために「ふるさと創造学」に取り組むのかを明確にして、動機付け、問題意識、目的意識をもって「ふるさと創造学」を行って行きたい。動機付けは教員の役割と認識して取り

組んでいきたい。

最後に、川内村秋元教育長より、「今協議会としては、ビジョンをいかに具現化するか検討しており、この研修会は教育復興ビジョンの具現化に向けた大事な会となった。ふるさと創造学は双葉ならではの取組である。今日の議論の中では、それぞれ町村の事情が異なっていたとしても、出来ない理由の議論ではなく、これから「ふるさと創造学を実施していくためにどうしていくか」といった前向きな意見が交換され嬉しく思う。地域とふるさと創造学をつなげていくために、幾つかの町村で学校支援地域本部を平成 26 年度から先行して設置していただきたい。具体的に進めていき、学校が中心となって地域に学校を根付かせていきたい。まさに現場にたっている先生方の魂を入れておこなってほしい。」と研修会出席の御礼が述べられた。

○今後の予定　　9月28日　ふたばワールド「ふるさと創造学」取組発表会
 12月または1月　各校代表生徒による成果の発表
 第2回郡内教職員による子供未来会議開催